

日本口承文芸学会 会報
【伝え】 第39号 2006年9月
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町 1-33
千葉大学文学部 荻原真子研究室
Tel/Fax : 043-290-2310

南と北の入墨由来譚

畠山 篤

南島の入墨は針突き（ハヂチ）といわれ、女性の手甲を彩っていた。事物・習俗があれば、その起源や意義を説く語りが生まれやすい。例えば、次の二つの由来譚がある。

尚円王の時代、聞得大君（キコエオオギミ）が難破して薩摩に漂流した。大君の美貌を聞いた領主は愛妾にしようとした。大君は国頭親方（クニガミウエーカタ）から知恵を授かり、手甲に針突きをしたので領主は幻滅し、大君は琉球に戻ることができた。これに因んで針突きをした。

八重山のホーリングスク親方が南の国に行く途中で遭難した。この時、海中から女の白い手が出てきて船を沈めようとした。すると、針突きをした女の手も出てきて難破を防いだ。こうして難を逃れられた。これに因んで針突きをするようになった。

話者によると、針突きをする理由・意義は次のとおりである。(1) 外世界に連れ出されない、(2) 厄（外社会からの侵人者）払い、(3) 成女の印、(4) 既婚の印、(5) 女性の印、(6) 装飾、(7) 子孫繁栄、(8) 後生に真つすぐ行ける。前者の由来譚は(1)(2)を示し、後者の由来譚は(2)を示している(3)～(7)は一括して解釈できるだろう。すなわち、針突きによって結婚する資格を得、その文様は装飾にもなり、子孫が生まれるとさらに針突きを追加する。(8)は、同じ針突きを持たない死者を後生の女たちが排除するという語りで示されている。(8)は(2)と同じ考え方に基づいている。このように、この針突きは女の理想的な一生を保証している。

他方、北のアイヌ民族の入墨はシヌエといわれ、女性の手甲と顔面を彩っていた。シヌエにも針突きに似た次の由来譚がある。

昔、飢饉に襲われた時、女神が家々の窓からシヌエをした手を差し入れて食べ物を恵んだ。ある村人が女神の顔を見たところ、顔にもシヌエをしていた。これに因んでシヌエをした。また、シヌエをした女性を悪魔が見ると女神と間違えて逃げた。これに因んでシヌエをした。前者の由来譚は(2)を示し、後者の由来譚は(1)(2)を示している。

話者によると、シヌエをする理由・意義は南島とほとんど同じである。

以上のような入墨の習俗とその機能・意味を示す由来譚が、近年まで南と北にだけ著しい共通点をもって伝承されている。この両者にはどのような文化的な脈絡があるのだろうか。この他にも、南と北が提起する問題は多いだろう。(青森県)

第30回大会報告

会場 白百合女子大学 2006年6月3日(土)、4(日)

◎6月3日(土)

シンポジウム 口承文芸研究のこれから

「落日の口承文芸」を抱きしめて

飯倉義之

2006年の日本口承文芸学会大会シンポジウム「口承文芸研究のこれから」は、パネリスト・フロア一体となって口承文芸研究の過去・現在・将来を考える、三〇周年の折目にふさわしい報告と討議の場となった。その意義を先取りしてしまえば、第二〇回大会の大林太良の講演「人類文化史における口承文芸」の問題提起「人類文化史における口承文芸の『落日』」に対してなされた十年目の回答といってよいだろう。

まず司会の荻原眞子氏、高木史人氏から概説がなされ、口承文芸研究者を学会創立の柱となった第一世代、創立時学生だった第二世代、創立後に研究を始めた第三世代、と分割した上で、パネリストに招いた各世代代表の意見を突き合わせ、「口承文芸研究のこれから」を見定めていこうという狙いが明確にされた。第一世代の代表として、元会長・野村純一氏より「思想としての口承文芸研究」と題して報告があった。(過去)に属することとして、日本口承文芸学会の初発には、比較研究の視座を持った初代会長・関敬吾に顕著であるように、柳田國男の昔話研究—家郷の学問—の限界をさまざまな学の来歴・視座の持主が集うことで乗り越えようとした理念があること、そして(現在)のこととして、声が情報化された現代社会では、サブカルチャーであった口承文芸がメインカルチャーであった文字文芸を逆転しつつあるのではないかとの提言がなされた。

続けて第二世代の酒井正子氏は「フィールドの現状から考える」として、琉球弧の歌謡文化の(現在)を報告。本土出身者や奄美二世三世がシマウタを志向する「シマウタのボーダーレス現象」や、現地での島ことばの衰退、シマウタのステージ化、シマウタの伝承と創作のいとなみといった状況を、音声・映像資料も用いてまとめた。

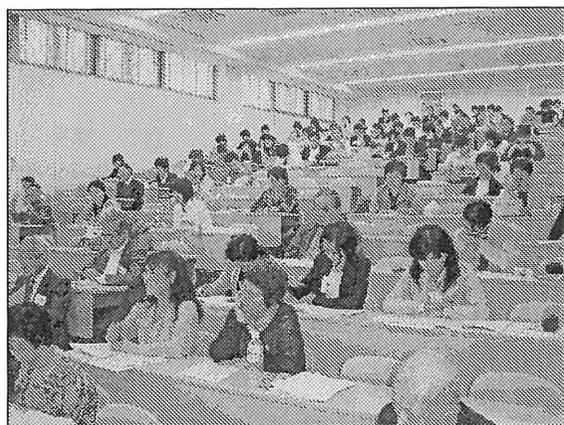
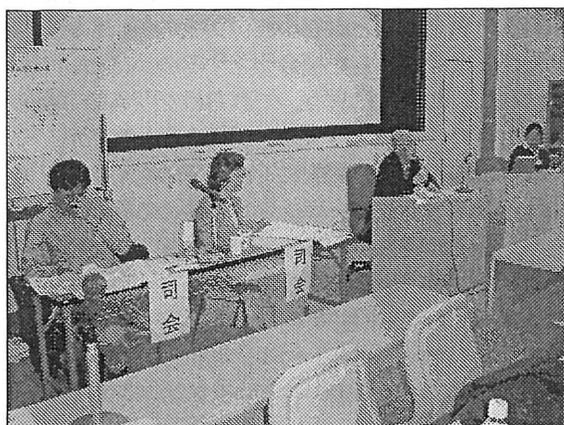
3人目、第三世代の真鍋昌賢氏の報告「口承文芸研究は『落日』をのりこえたか」は、副題「研究対

象としての「二次的な声」に沿って、戦前期の浪花節と(現在)のラジオ深夜便という「声の場」のありようを指摘。従来の口承文芸研究の枠組みでは捉えられなかった、レコードやラジオといった二次的な声、複製された声の語り手と聴き手を、いかに口承文芸研究は対象化できるだろうか、という(将来)の問題を発掘した。

対してフロアから活発な討議が起きた。司会の要請により小澤俊夫氏・飯倉照平氏・坂井弘紀氏・中川裕氏が発言。小澤氏は口承文芸の「耳で聴くよろこび」を指摘。飯倉氏は中国民話の研究の(現在)を補足。坂井氏は中央アジアの芸能、中川氏はアイヌ語の現状からと、背景は違えども、両者ともに「文字化された語りの還流」と「アイデンティティの核としての口承文芸」という同一の(現在)を報告した。

福田晃氏は10万年単位の文化史の問題としては大林発言も肯定すべきと指摘、また研究対象を広げる一方、絞る必要もあると提言。川森博司氏は「落日の口承文芸」とはかつての研究対象の衰退にすぎないのではないかと指摘、花部英雄氏は話者の変化と研究者の働きかけの可能性を述べ、鈴木昭英氏は警女唄伝承の変化を例に(将来)を悲観的にみる必要はないと言挙げした。常光徹氏は複製される声のいとなみの可能性を重視し、また、昔話の話型をカタログ化し得たこと自体が昔話というジャンルが終焉に向かっていった証拠ではなかったと(過去)を総括した。齋藤君子氏はネットという新たな伝承伝播の場について、田中瑩一氏は伝承が教育の場や保存会でなされる(現在)のありようと(過去)との相違に、大島建彦氏は「落日」は口承文芸に限らずかつての生活全てが衰退していると、それぞれ注意を喚起した。米屋陽一氏はかつて自身ラジオ放送に関わった経験をふまえて「聴くよろこび」を「語るよろこび」につなげる(将来)を希望し、根岸英之氏はそのためにも第一世代の研究史を期待すると述べ、佐藤皇太郎氏は語りと映像の相似点を指摘した。最後に司会の高木氏が、今日の活発な議論が口承文芸研究を「ひらいてゆく」突破口となっただろうとまとめた。

民俗学／文学の「一ジャンル」として成立した口承文芸研究が、声の文化をとらえる「方法」として読み替えられようとしている流れが、報告と討議から浮かび上がるのではないかと。「〇〇を扱うから口承文芸研究」なのではなく、口承文芸研究のまなざしをもって昔話を、シマウタを、ラジオ深夜便をとらえることこそが（大きくいえば）人類文化史の問題に新たな解決をもたらす道となる、はずだ。さまざまな対象を「口承文芸として、まなざす」ことが、口承文芸研究を（過去）から（将来）に繋ぐのだろうと実感できたシンポジウムだった。（千葉県）



(シンポジウム風景)

◎6月4日（日）

研究発表

阿部真貴「探訪調査の方法 絶え行くもの の研究 『女川飯田口説』について」

内藤 浩誉

宮城県石巻における江戸中期の事件「女川騒動」を題材に、主に宮城・岩手周辺で伝承された『女川飯田口説』について発表者は研究を重ねてきた。詞章分析を行い事件設定が盆である点から「供養」と関連づけた昨年の発表に続く登壇である。盆踊りとの関与について見解を述べたが、会場からも指摘されたように、実状を窺わせる資料調査の継続が期待される。

さて、今大会は「口承文芸研究のこれから」というテーマに則る形で発表が行われたが、口説伝承者が亡くなって既に居ない現状から『女川飯田口説』を「絶え行くもの」と発表者は位置づけた。音曲を伴い語られる口説でありながら「実際に聴くことができなくなった」ものを扱うにおいて、写本や採譜に加え視聴覚資料の有用性を説く。文字と音楽両者の活用を重視するわけだが、そこで今後の研究の可能性をつなぎ発展を促す為に、視聴覚資料の収集および活用において共有できるシステムを作る必要性を指摘する。伝承が絶え行く一方で多様なメディアが活用される現代において、対象を立体的に捉え実態を浮き彫りにするには、資料の博搜が求められよう。実現には様々な課題もあるだろうが、長い目で見て各団体・研究者が協力して方策を編み出し一歩を踏み出すべきという意見には同感である。同時に、研究者個々においては、詞章（文字）のみならず音曲に対して理解する力が求められてこよう。

また、伝播に関し瞽女との関与を述べる。歴史語りに伴う芸能者の存在は長く指摘されてきた通りだが、女性の事件を女性芸能者が取り上げる中で構築される世界観、時代・地域の関心に根ざした受容がいかなるものなのか、伝承の実態や現場が生き生きと立ち上がる研究として更に深められることを、今後も期待したい。（神奈川県）

阿部敏夫「北海道移住者の民間説話について -
事例：北広島・大蛇神社伝説の誕生と変容 -」

花部 英雄

北海道の開拓が始まってから既に120年はたつ。移住地の過酷な自然との苦闘の中で、伝承がどのように発生と形勢されていくのかといったナイーブな伝説生成の問題を追及したのが、阿部敏夫さんの発表である。

開拓の始まった明治17年、現北広島市のことである。久保武右エ門がタモノキ（トネリコ）の老木を焼いたところ、火が一週間にわたって燃え続けたという。燃え残りにとぐろを巻いた蛇の骨があった。武右エ門は家に保管していたが、噂を聞きつけてきた人が瘡（おこり）に効くからと言って求めたが譲らなかつたという。祟りを恐れた村の者が祠を建てて蛇の霊を祭ったという。その大蛇神社の祠が昭和36年の大洪水で流されてしまう。久保家の地を引き継いだ渡辺家の現戸主の忠氏が、平成10年に「大蛇神社跡」の記念碑をその跡地に建立した。

この話は久保家の隣の岸本家に嫁いだトモさん（明治17年生まれ）93歳の時に語ったもので、昭和42年発行の『郷土研究広島村』に掲載された。これがもとになって、その後郷土誌や民話集、写真集、絵本、紙芝居などに取り上げられ、作家や郷土史家、図書館、行政の関係者の手によって潤色受容されていく。最後に阿部さんは伝説の意義を簡条書きに整理しているが、いまそれを私なりにまとめてみると、まずこの伝説が移住生活が安定し過去への郷愁と次世代への継承を意図した時期に生成したこと、次に伝説がさまざまなメディアや階層の人々によって視覚化を伴ない創りあげられてきたこと、そして何よりも伝説を必要とする人々の暮らしや心が背景にあることを忘れてはならないということになろう。

さて、文字を媒体とした伝説の変容を、北海道の開拓という近代の特殊性の中に浮かびあがらせたものである。伝説の事実の把握に多少気になった点はあるが、北海道の伝説をさまざまな角度から掘り下げている阿部さんの問題意識の鋭さとその成果が示されたものといえる。（神奈川県）

久保華誉「明治期における翻訳と昔話 - 『漁師とその妻』あるいは『金の魚』」

田中 浩子

「漁師とその妻」（ATU555）の日本への受容について、明治から昭和初期の翻訳資料と日本の昔話口承資料から考察した発表だった。

口承の「漁師とその妻」には、グリムの「漁師とその妻」（KHM19）の翻訳の他に、それを参考にしたと言われるプーシキンの「金の魚」の翻訳とも類似が見られるという。両者の翻訳が各4話ずつ紹介され、口承も13話紹介された。そして、口承資料の中に、両者の翻訳とどのような類似が見出せるか、が示された。その他に複合型として二つ、和田・星野訳「黄金丸」と巖谷小波「黄金の魚」も紹介されたが、なぜこれらを複合型とするのかについて説明はなかつたように思う。これらはグリムの「金の子ども」（KHM85）の翻訳（案）と思われるが。

口承の結末には、翻訳に近い「元のもくあみ」で終わる話と「ハッピーエンド」で終わる話があるという。後者の結末があるのは「動物報恩を重視するため」ではないかとの推論だった。

フロアーからは、櫻井美紀氏から、海の魚に願いごとをする話は、グリムの他にも世界的にあること、また現代でも外国の昔話を日本の子どもたちに語る時、日本のものに置き換えて語ることがあるなど興味深い指摘があった。（東京都）

坂田美奈子「アイヌの散文物語における漁場および和人描写の特徴」

立石 展大

坂田氏の発表は、歴史学からの発言という色合いが濃い発表であった。例えば、それは題目中の「漁場」読み方の相違に象徴的に表れていた。質疑応答で指摘されたことであるが、「漁場」を北海道の現地で使われている「りょうば」と読むか、坂田氏が発表中に用いていた、歴史学で使われる「ぎょば」と読むかという相違である。

また、発表冒頭の課題設定の背景において、アイヌ口承文芸を「文明世界とは異質の素朴な社会の文化。現代において知的な意味で参照に値するとは考えられていない」と捉えられているとした点においても、民俗学との距離が表れていた。民俗学におけるアイヌ口承文芸の研究では、このような捉え方はしていない。

ただ、坂田氏の発表の狙いは、上記のようなウエペケレ（アイヌの散文昔話）の扱われ方に対して疑問を抱き、その分析・再評価をすることでところにある。本発表では、4話の分析が行われた（アイヌ無形文化伝承保存会『アイヌの民話』2・中川裕『アイヌの物語世界』・「歴史評論」639号の志賀雪湖論文・久保寺逸彦『アイヌの昔話』からそれぞれ1話ずつ）。それぞれにアイヌと和人の葛藤が語られている。和人を善悪定まらないものとして語る場合、悪人として語る場合、アイヌを歓迎する存在として語る場合、和人と衝突、融和の中から紡ぎ出されてきたアイヌの知恵を、それらの語りから汲み取っていく。そして、これらウエペケレ中の漁場とそこにまつわる和人の描写から、現代の文化対立を始めとする社会問題を解決していく手がかりへと繋げていく。

今回の大会の研究発表テーマは、「口承文芸研究のこれから」であった。坂田氏の発表は、ウエペケレの新しい読みと、現代社会への提言であり、本大会のテーマに沿うものであったとすることができる。（埼玉県）

語りと報告

金 基英・野村敬子「『多国籍社会日本』と昔話 - 新たな語りの展望 -」

杉浦 邦子

当日の語り手・金基英（キムキョン）さんが、韓国宮廷の衣装を纏って階段教室の階を下りてくると、「きれいなえ」という声があがった。既にその装いからは、学会員の多くが抱いている語り手像とは違いますよ、というメッセージを発していた。

報告者・野村敬子氏から伝統的な語り手とは全く異なった語り行動の人として、金基英さんの簡単な紹介があった後、さっそく語りの時間となった。

「明けの明星モスン」「嫁と姑の話」「青蛙」「蚊の由来」「田螺の嫁」である。このうち、日本の「雨蛙不孝」と同一話型である「青蛙」を山形弁と韓国語で語り、会場を沸かせた。山形弁は姑の言葉だった由。彼女は、普段遣っている共通語で語るが、山形方言には母国語で話すような安らぎを感じるという。

金さんは、夫の国である日本に来て暮らすうちに野村氏と出会い、韓国民話を語るようになった。日韓の文化の掛け橋になろうとの思いが強い。華やかな衣装は聴衆の視覚に訴え、韓国民話は音声に乗って、日本の民話との共通点や差異を印象づけたが、彼女の語り

を聴きながら、普段着のチマ・チョゴリで語る姿も見たいと、私は思った。

次に、野村氏は数々の資料を用意し、配偶者ビザで入国している外国人妻が増え続けている実情を示し、日本は多国籍社会になろうとしていると指摘した。彼女たちの多くは、嫁不足に悩む農家の長男に嫁いだ女性たちであったが、結婚後は、個性や出身国を忘れて日本人に同化するよう望まれた。1993年に、須藤オリブさんが語った『フィリピン民話』を出版したのは、国際結婚で生まれた子どもにとっての母の国を伝えるためであった。花嫁たちが母国を消そうとしたり、反対に拘ることで起こった悲劇を目にした野村氏は、子の母として、生まれた国の文化の伝え手であった欲しいと願い、命を産み育む女の言葉に希望を託した。金さんが一つの答えを出したといえよう。

会場から金さんのような語りであれば、外国の昔話の伝播・伝承はあり得ると実感できたという発言があった。今後、いろいろな国の昔話が、生の声で受け入れられることを期待したい。

（愛知県）



（金さんの語り）

事務局より

《寄贈図書》

- ・ 佐々木達司編『新版 青森県なぞなぞ集』青森県文芸協会
- ・ 石井正己監修 佐藤誠輔著『続遠野昔ばなし<聴耳草子>より』遠野物語研究所
(非売品)
- ・ 下野敏見『屋久島の民話 紅の巻』南方新社
- ・ 竹原 滋『グリム童話と近代メルヘン』三弥井書店
- ・ 小長谷有紀編『「大きなかぶ」はなぜ抜けた？謎とき世界の民話』講談社現代新書

《「国際会議」企画案の募集》（お知らせ）

『伝え』38号でお知らせし、また第30回大会総会において本学会主催の『国際会議』について提案・承認された「国際会議」の企画案を募集いたします。10月21日の理事会において検討、決定しなければなりませんので、どうぞ、企画についてのご提案をお寄せください。

《学会ホームページに関連するお願い》

事務局では口承文芸学会のホームページを今年度中に刷新する予定でありますが、それにあたり、会員の皆様が開いているホームページや、国内・国外の関連するサイトのリンク集を充実させたいと考えております。御自分のホームページにリンクを張ってもよいという方、リンク先にふさわしいサイトの情報をお持ちの方は、下記のアドレスまでお知らせください。

事務局ホームページ担当 中川裕 nakagawa@bun.L.chiba-u.ac.jp

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学文学部 荻原眞子研究室内

Tel&Fax : 043-290-2310 / e-mail : shinko@bun.L.chiba-u.ac.jp

学会ホームページ : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/sfnrj/>